

## 1 2月上旬

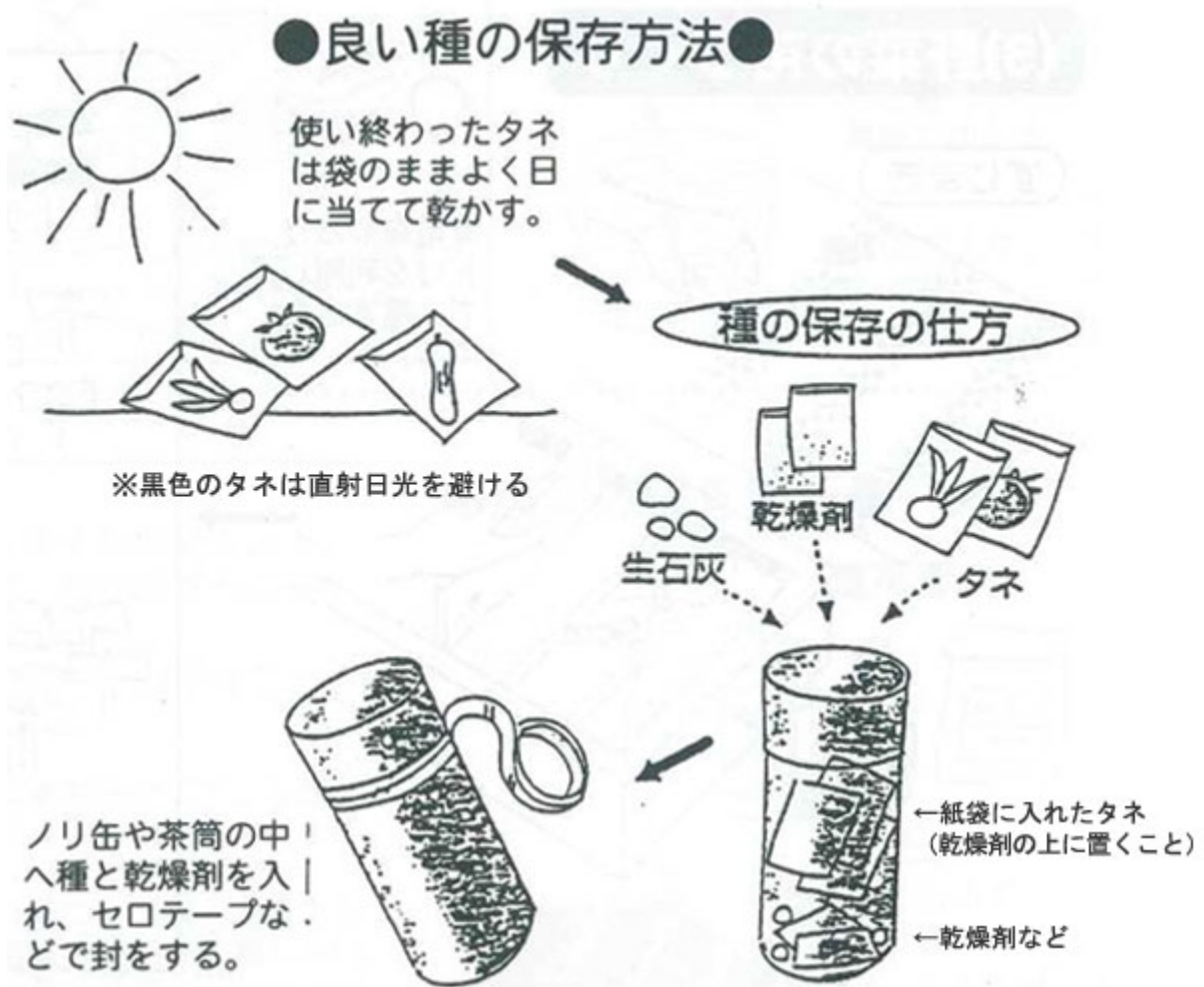
### 残ったタネの上手な貯蔵法

タネは、シーズン中に全部使い切れず、残ってしまうことがあります。タネの寿命は長短いろいろですが、いずれも放っておくと、翌年には発芽率がかなり落ちてしまいます。来年も確実に発芽させるためには、好適条件で貯蔵しておくことが大切です。

発芽力が落ちるのは、タネが呼吸によって消耗したり、病原菌が増えたりするためです。これを防ぐためには乾燥状態にすることです。

湿度を30%程度にすれば発芽力の低下が抑えられます。湿度も低めの方がよいのです。

簡単な方法として、のりやお茶の空き缶に、日光に当てよく乾燥したタネを紙袋に入れ、お菓子の袋に入っている乾燥剤（シリカゲルなど）と一緒に入れ、外気が入らないようにセロテープなどで密封し、冷暗所で保管します。（特に夏は涼しい冷暗所に保管します）



## 1 2月中旬

### ハクサイは結束して防寒対策を

結球して食べ頃になったハクサイの残りは、畑でそのままにしておくと、厳しい霜や寒風にあうごとに、頂部の柔らかな葉や外葉がカサカサになり、やがて腐ってしまいます。

球が完成すると耐寒力が弱まるので、未収穫のハクサイは防寒対策をします。

霜が降り始めたら、株の外葉を球を包むように立て、上の方を鉢巻きのようにプラスチックのヒモか、ワラで縛っておきます。早めに行うと、中が害虫の住みかになるので、必ず霜が降りてからするようにします。

また、収穫してから貯蔵する場合は、風通しのよい作業小屋の軒下など、霜が降りない場所に、頂部を下にして立てて並べておきます。新聞紙にくるんでおいてもかなり長く持ちます。



① 外葉を束ねます



② 株の中心のあたりをひもで結びます



③ 株の上部をひもで結びます

# 1 2月下旬

## 野菜が喜ぶ土とはどんな土！

野菜が喜ぶ土とは、軟らかく栄養分に富んだ土が美味しい野菜を作ります。そのためには、土の硬さ、土質、酸度、栄養バランスなどの項目を調べる必要がありますが、今回は土質について調べてみることにします。

土は主に砂と粘土からなり、土質は両方のバランスで決まります。

砂は粒子が大きいので通気性や水はけに富み、粒子が小さい粘土は保水性や保肥力を高めます。

野菜づくりに最適なものは、両者が適度にミックスされた壤質の土（壤土）。つまり、通気性、排水性、保水性、保肥力のすべてのバランスがよく、耕しやすい土です。

砂と粘土の割合を判断するには、土を採取して水を含ませ、指で棒状にこねます。まとまらずにぼろぼろと崩れるのは砂質、粘りが強くて細長くまとまるのは粘土質の土です。その中間の鉛筆くらいの太さにまとまる土が理想的です。

砂質は保水力が弱く、乾燥しやすく、肥料の持ちも悪い。改良するには、多量の堆肥や腐葉土を施します。水はけや、通気性の悪い粘質土も、砂質土壌と同じように堆肥や腐葉土を施します。バーク堆肥やパーライトなどの土壌改良材も効果があります。

### 土質の区分

強粘質	粘質	壤質	砂質	区分
<p>手にくっついて、ぬるとした粘土の感じ</p>	<p>大部分が粘土でほとんど砂を感じない</p>	<p>砂を多く感じるか、または砂と粘土が半々の感じ</p>	<p>ザラザラしてほとんどが砂だけ</p>	<p>触感</p>
<p>こよりのように細くなる</p> 	<p>マッチ棒くらいの太さになる</p> 	<p>なんとか鉛筆くらいの太さにまとまる</p> 	<p>棒にならず固めることができない</p> 	<p>粘土細工の結果</p>

1

畑土を少量採取する。



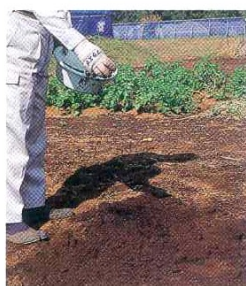
2

水を少し加えて湿らせ、親指と人差指で細長くこね、粘土細工をする。



3

できあがった粘土細工とこねた感触から土質を判断する。



粘質土壌の場合 砂を混ぜるか、籾殻やバーク堆肥を入れて混ぜる

砂質土壌の場合 粘質な土壌や堆肥を入れて混ぜる

### 改良法